

# 『大学入試センター試験 必携ガイドブック』 および「2015年センター英語分析と指針」

竹岡 広信

## 1. 『大学入試センター試験 必携ガイドブック』

数研出版の『英語プレノート』『英語40分プレノート』の付録として『大学入試センター試験 必携ガイドブック』（以下、『必携ガイドブック』）を執筆するようになって3年目となる。

本書は、まず第1問で「最小限の事項で最大限の効果」を上げるため、発音・アクセントの原則と頻出語のリストを掲げている。本書の使用時期が秋以降であることを考えれば、「ほかの教科の邪魔にならない程度の最小限の事項」が要求されるためである。また、本書の発音・アクセント対策の音声はダウンロードできる。この本は「おまけ的存在」ではあるが、まじめな作りとなっているのである。「センター試験に出ました！」という受験生からの声を毎年いただけるのは、ありがたい。

英文法・英熟語は、過去のセンター試験で頻出の問題を中心に編集し、これもギリギリの数まで絞った。

知識問題以外は、2015年の問題を用いて、解き方を解説した。読解問題では、「各パラグラフの要旨メモ」が有効であると考えている。メモにまとめることで、頭の中が整理されるからである。本書では、メモの取り方を視覚的にわかりやすいように提示している。「パラグラフメモをしてから、点数が飛躍的に伸びました」という声がほとんどだ。

また、実際にセンター試験を受験した生徒の正答率を提示していることも、本書の大きな特徴である。受験生を「得意」「普通」「苦手」の3つの集団に分類して、各設問にそれぞれの正答率を示した。次の表が、それぞれの母集団の平均点と人数である。

|     | 得意     | 普通     | 苦手     |
|-----|--------|--------|--------|
| 平均点 | 179.0点 | 157.1点 | 123.0点 |
| 人数  | 114名   | 171名   | 74名    |

センター試験を受験する生徒には、まず2015年の問題を解かせてみて、間違えた箇所の正答率の参照と誤答の分析を本書でさせ、弱点とその対策を考えさせることが効果的だと思われる。

## 2. 英語教育の変革のうねり

英語教育改革が昨年から本格化した。

5年後の新テスト導入のための有識者会議も立ち上げられた。かつて、共通一次試験からセンター試験に切り替わったときや、リスニング問題が導入されたときにも、現場には大きな不安があった。「いったいどのような変化が起きて、どうなるのであろう」と戦々恐々としていたことを思い出す。それも今から思えば杞憂であった。つまり、結果としてよい問題へと変化しているのである。リスニング問題も開始から10年を越え、学力を測るのに安定した問題へと改善されてきた。新テストも、現行のセンター試験を基盤として、さらに改良が加えられたものになると期待できる。

ライティングとスピーキングはどうなるかはわからないが、せめてリーディングとリスニングの割合を1:1にしてほしい。そのことによって、現場の意識は劇的に変化するであろう。

先日、今の小学生の習い事の人気ランキングを見て驚いた。なんと、第2位が「英語」だったのである。小学生の英検受験者も相当な数になってきたと聞いている。小学生のときから4技能を鍛えてきたこの子たちが、大学受験を迎える日はそんなに遠くない。

高校においても、現行のシステムを抜本的に見直すことが必要であろう。リスニング主体の授業をすれば、情報量が増え、生徒たちが英文を前から読む姿勢も強化されると思われる。

### 3. 第1問(発音・アクセント)について

今年は発音問題に「ちょっとした変更」があった。昨年は約70%が、「外来語」からの出題(glove / onion / oven / casual / classic / label / loose / pause)であったが、今年はその半分(handle / handsome / hook / mission)に激減した。「センター試験では外来語がねられる」といった「風評被害(?)」を食い止めるためかもしれない。-a-の発音が2年連続で出題されたのも、「ここ数年で出題された発音は出ない」という「センター試験の傾向」を作りたくないがためであろう。

とはいえ、共通一次試験、センター試験黎明期からの「先祖返り」の問題はあいかわらず多い。ancientは1979年、floodは1993年、hookは1986年追試、woodenは1981年追試と1999年に出版されている。今後もこの傾向は続くであろうから、古い問題を徹底的に研究しておきたい。

問3は、母音+sionの発音と、子音+sionの発音の差異を尋ねた問題。これは原則を知らなくても正解できそうな問題である。

従来のアクセント問題は「(-ate, -ousのように規則性がある特殊語尾を除いて)名詞は前に、動詞は後ろにアクセントがある」という原則に基づいたものがほとんどであった。今年も、動詞の派生語がcomponent (<compose), detective (<detect)の2語、特殊なものがsuccess (1990年追試, 1992年追試, 2013年に出版), ingredientの2語出されたという点で、珍しいかもしれない。

特殊語尾は、-ateがappropriateとcomplicatedの2語、-ousがambitiousの1語であった。-ateは本試験で31回、追試験で18回、-ousは本試験で10回、追試験で7回出版されている。

アクセントは、「得意」と「苦手」とでずいぶんと差が出るので、「苦手」な生徒に対しては音声重視した指導を徹底したい。

### 4. 第2問(文法・語彙・語句整序)について

目についたものを何題か取り上げてみたい。

問1 Did you make your grandfather angry again? You should [ ] that.

- ① know better than      ② know less than  
③ make do with          ④ make up with

[答] ①

know better は1997年に出版されて以来の出題。make do with「～で済ます」やmake up with「～と仲直りする」は、今までダミーの選択肢でも全く見たことのないものである。

問4 My granddaughter has started a career as a singer, but I really [ ] an actress as well in the future.

- ① hope she became  
② hope she will become  
③ wish she became  
④ wish she will become

[答] ②

従来、「現在の事実と反する願望」はS wish+S+過去形、「過去の事実と反する願望」はS wish+S+過去完了形、とする記述が多いが、そのような知識ではこの問題は解けない。③のように動詞動詞を用いた場合、習慣的行為になってしまうからである。

#### 類題

A: Marie, I've got a couple of tickets for a concert this evening. Why don't you come with me?

B: Oh, [ ] but I've got homework to finish by tomorrow.

A: That's too bad. Maybe some other time.

- ① I hope I can,              ② I hope I will,  
③ I wish I could,          ④ I wish I would,

[1990年 追試験]

[答] ③

I wish I couldは断るときの決まり文句。ここではI wish I wouldがダミーとなっている。

問8 Sorry. We talked about it just now, but ( A ) did you say ( B )?

- ① A: how                  B: the best solution  
② A: how                  B: was the best solution  
③ A: what                 B: the best solution  
④ A: what                 B: the best solution was

[答] ④

「do you thinkは疑問詞の直後に挿入し、do you knowは疑問詞の前に置かれる」は、よく書かれているが、「do you sayは意味に応じてどちらでもよ

い」は、あまり見かけない。この問題では、挿入されている did you say を除いて考えればよい。

問7 Mt. Fuji stands impressively [ ] the blue sky.

- ① against ② among ③ behind ④ by

[答] ①

「得意」でも正答率が40%以下である。「青空に映える山並み」などの英作文をしたことがあれば解けた問題だが、いわゆる「文法問題集」では見かけないので、正答率が低かったのかもしれない。

文法に重きを置きすぎた授業や、実用頻度を無視した問題を数多く掲載した文法問題集、丸暗記の単語集などが高校から消えることを願ってやまない。

### 5. 第2問C(新傾向問題)について

昨年度追試験の出題形式が本試験に登場した。選択肢が多く「苦手」の正答率は相当悪い。「山勘」では当たらないという意味で「良問」かもしれない。

問3

Sophie: Look at those beautiful butterflies!

Let's try to catch one to take home.

Hideki: No way! [ ] Just enjoy watching them!

(A) I wouldn't (B) It wouldn't

↓

(A) dream of doing (B) dream to do

↓

(A) such a thing! (B) your best!

① (A) → (A) → (A) ② (A) → (A) → (B)

③ (A) → (B) → (A) ④ (A) → (B) → (B)

⑤ (B) → (A) → (A) ⑥ (B) → (A) → (B)

⑦ (B) → (B) → (A) ⑧ (B) → (B) → (B)

[答] ①

「dream は人を主語にする」「dream to (V) という形は存在しない」を知っていれば解ける問題。文法問題の延長である。ことさら、新たな対策は必要ないと思われる。英作文で I have never dreamed of ~ などを使ったことがあれば解ける。

### 6. 第3問Aについて

会話が第3問Aに移行した。これは昨年の追試

験と同様である。「会話問題」というよりも文法問題のような問題である。問1は remember「～を覚えている」と remind「～に思い出させる」の違いを尋ねた問題。問2は、turn out to be「結局～となる」を尋ねた問題。

### 7. 第3問Bについて

昨年から登場した「不要文削除問題」は、今年も継続された。英作文、あるいはスピーキングにおいて非常に重要な「結束性(cohesion)」を問う問題。

問1

Stamp collecting is an educational hobby that can be inexpensive and enjoyed whenever you want. ① It provides a nice and practical way of learning about history, geography, famous people, and customs of various countries worldwide. ② This hobby began soon after the world saw the first postage stamp issued in Great Britain in 1840. ③ You can also get started without spending money by saving the stamps on envelopes you receive. ④ In addition, you are able to work on your collection any time, rain or shine. If you are looking for a new hobby, stamp collecting might be right for you!

[答] ②

「得意」の正答率は、全問で90%を越えている。その一方、「苦手」は、問1が50.0%、問2が70.3%、問3が44.6%と差がついている。上の問1は、99語からなるエッセーで、テーマは「切手収集のよいところ」。②のみが「切手収集の歴史」について述べているので不要文だとわかる。この文のみが過去時制で書かれていることから、答えだとわかってしまうかもしれない。なお、①「世界中のさまざまな国の…」のくぐりだりは「漠然とした記述」だから、「具体的な記述」が続くのが普通。たとえば「日本で発行されている文化人シリーズの切手を見れば、小学生でも明治の思想家の西周などを知ることが可能となる」などの記述が必要。現状のままでは、生徒がよくやる「具体性を欠く理由の列挙」になってしまう。全体の語数を増やしてでも、模範的なエッセーを問題文としていただきたい。

## 8. 第4問Aの変更について

昨年は、第4問Aの問4(「最後の段落に続く話題」を問う問題)の正答率が低かった。「得意」で平均40%、「苦手」では20%程度しかなかった。これは「新傾向にとまどった」ことが大きな原因であったようで、今年はそのような混乱もなく受験生は落ち着いて解答できたようだ。

問1は、第2パラグラフを読めば解ける。「苦手」な人でもおよそ80%の正答率であった。

問2、3は、「SNSの危険性に対する意識は、生徒、親、教師の間に差があり、生徒間でも学年が下がるほどその意識も下がる」という本文全体の趣旨がつかめれば解ける。「得意」の正答率は、それぞれ97.4%と98.2%で相当高い。「苦手」の正答率は、59.5%と75.7%で、特に問2で差がついたようである。問2は「比較の基本」を尋ねた問題であるが、過去にも類題は多数ある。

類題 The graph indicates that the twelve-year-old children [     ] .

- ① gave up as frequently as they used either strategy in step three
- ② got the lowest percentage correct using the number strategy
- ③ were the least likely to give up in the three steps
- ④ were the most successful when attempting the first step

[2000年 本試験]

上の問題は、グラフから「12歳の子どもが最上級とは無関係である」ことがわかれば、最上級を含まない①を消去法で選ぶことができる。正答率は30%程しかなかった。今年の問題と同様に最上級がポイントとなっていることに注目したい。重箱の隅をつつくような知識を問うのではなく、最上級や比較級などの「比較の王道」からの出題である。

問4は、本文最終文 There are several possible explanations for this gap. を見て「ではどのような説明かな?」という疑問がもてるかがポイント。つまり、センター試験が昔から出題している「漠然から具体」の流れがつかめれば簡単に解ける。「得意」で94.7%、「苦手」でも75.7%の正答率になっている。

## 9. 第4問Bについて

昨年の正答率が非常に低かった。それは、「英文すべてを読んで、全体像をつかむ」ことが要求される問題だったからである。

「普通」「苦手」の受験生の多くは、図表の上の方だけを見て問1を解き、図表の真ん中を見て問2を解く、というような手法を用いている。昔のセンター試験や模擬試験ではそういう問題も見られるが、昨今の問題では「全体像をつかむ」ことが要求されている。今年も問1を解くためには広範囲を読まなければならない。

昨年は、そのことに気がつかない生徒が多かったため、正答率は相当悪かった。しかし、今年を全体を読まないで解けない設問形式になっていたため、かえって正答率は高い。今後もこの傾向が続くと思われる。

## 10. 第5問・第6問

第5問も第6問もそれぞれ、全体で650語～700語程度の英文を読んで、情報をつかむ問題。「全体をざっくり読む」ことが要求されている。1979年に始まった共通一次試験のころに比べると、英文が格段に長くなった。また、今年昨年よりさらに語数が増え、「得意」と「苦手」の差がますます広がった問題である。

多読・多聴を軸とした勉強こそが骨太の力をつけるはずである。現在、主流ではなくなりつつあるとはいえ、「50分の授業で教科書1～2ページ進む」という旧態依然とした授業の形式は見直されなければならない。

1回の授業で、「ある程度長い英文を通読させ、その文が何を言いたいのかを答えさせる。できれば、その要旨を英語で言わせる」というのが主流になることを願う。

(洛南高等学校講師、駿台予備学校講師、竹岡塾主宰)  
 ※予備校にて教員対象の授業を春、夏、冬に受け持つ。  
 『入試必携 英作文 Write to the Point』、『Clues to Reading 英文和訳の徹底演習』、『Grammar Gym 英文法テスト 5分で確認 重要ルール』(以上数研出版)など著書多数。